プロット②　異世界バトル

夜の闇の中、呪文を詠唱している魔術師がいる。
その周囲には無数の小さな人形が群がり、彼に襲いかかっていた。
剣、斧、槍を手にし、攻撃を仕掛けるが……いずれも届くことはない。
魔術師の展開した魔力障壁が攻撃を全て防いでいた。

人形も周りに、月夜に照らされ糸が見える。
闇に紛れた糸はずぅっと伸びており、遠く離れた岩の影まで続いていた。
そこに隠れているのは一人の人形師。
指先にはリングが嵌められ、糸はそこから伸びている。
人形師は暗殺者である。魔術師を殺すよう命を受け、姿を隠しながらその命を狙っていた。

「しかし……硬すぎますねこれは……！」

人形たちの持つ武器には各々、強力な付与が掛けられている。
一つ一つが並の魔力障壁なら楽々貫ける代物だ。それらによる連撃すらも、魔術師の魔力障壁はびくともしない。
無表情のまま魔術師の詠唱は続く。詠唱を中断するどころか、遅延すら起こせず、ただ時間が過ぎていく。

「隕石《コメットティアー》」

そして、ついに魔術師の呪文が完成する。
と同時に、空が赤く染まっていく。
ぼっ！　空気が爆ぜる音がして、雲に大きな穴が空き、そこから真っ赤な石弾が落ちてきた。
どがががががが！　落ちてくる隕石で破壊されていく人形たち。
魔術師は顔色一つ変えずにその光景を見つめている。勝利を確信している様子だった。

だが人形使いの目は死んでいない。
指先を動かすと、壊れたはずの人形が動き始める。
それらは一箇所に集まっていき、重なり合っていく。そして何か、巨大なものが生まれようとしていた。

「起動せよ。人形王……！」
「ウオオオオオオオオオッ！」

巨大な人形が吠える。
人形は壊れたのではない。
壊れる前に分解し、隕石の雨による攻撃を躱していたのだ。
人形師がぐい、と指を握り締めると共に、人形は拳を固める。
そして連動するように、一撃。
ごぉん！　魔力障壁が揺れ、わずかなヒビが生まれた。

「ふぅん、今回の刺客は少しはできるようだ」

そう呟いて、魔術師はほんの少し微笑を浮かべた。

－終－